

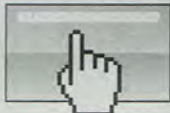
札幌市中央図書館では4月、電子図書館コーナーを館内に開設した。当面はパソコンとタブレットで電子書籍を閲覧するののだが、10月以降、インターネットを使った電子書籍貸し出しサービスが始める。「電子図書館」の内容を紹介するともに、課題を探った。

(編集委員 藤崎貞信)

同図書館では、2011年度から電子図書館開設に向けての取り組みを本格的にスタートさせ、道内の出版社と協力し、電子書籍を確保していくとともに、市民モニターへの貸し出し実験を行い、システムを整備した。

電子図書館コーナーをのぞいてみた。備え付けられたパソコンで「札幌市電子図書館」のサイトを開くと、左側には「歴史」「社会科学」など13のジャンルが並び、中央には「新着資料」「さっぽろ再発見」「北海道を知る」「札幌の歴史を振り返る」などのコーナーがある。「文学」のジャンルには1024あり、日本文学279、英米文学334、フランス文学155などで、ロシア文学の巨匠、ドストエフスキーは「カラマゾフの兄弟」など5作品があった。

キーワードでも本を検索できる。「夏目漱石」を探すと、「しほり」「門」



札幌市電子図書館

ネットで借り返却不要

などの作品が出てきたが、「村上春樹」は1点もなかった。読みたいタイトルをクリックすると、電子書籍は紙の本のページをめくるように読むことができる。文字を拡大できるので、お年寄りには大変便利だ。

■課題は書籍の少なさ

貸し出しサービスが始まれば、図書館など窓口に来なくても、いつ、どこからでもパソコン、タブレット、スマートフォンを使い、ネット上で借り、読むことができる。利用対象は紙の書籍と同じく札幌市民が札幌市内への通

勤・通学者。貸出券をつくり、パスワードを登録すれば、「札幌市の図書館のホームページ」にアクセスし、インターネット上から電子書籍を借りられる。病院に入院している人なども気軽にタブレットで読書に親しめるほか、小さな子供を持つ親も家で絵本を読み聞かせができる。

図書館側にも利点がある。貸し出しと返却業務が不要になるほか、期間が過ぎると画面から電子書籍が自動的に消えるため、延滞発生時の催促がいらない。所蔵スペースの心配がなく、本の紛失、盗難などの恐れもない。

一方、課題もある。読める電子書籍は、商業出版物2300、「広報さっぽろ」など地域資料100の合わせて2400タイトル。図書館向けに電子書籍を販売している図書館流通センターは「図書館向け電子書籍は1万2千点。人気のある書籍がまだまだ少ないのが悩み」（竹内悟札幌営業所長）としている。コンテンツの充実がカギとなる。

日本図書館協会によると、全国の公共図書館で電子書籍の貸し出しサービスをを行っているのは30館弱で、徐々に増えている。出版社側でも講談社など

3社が昨年、会社「日本電子図書館サービス」を立ち上げるなど、公共・学校図書館向け電子書籍への関心が高まっている。

■道内の出版物は充実

札幌市の電子図書館の特色は、道内の出版社などと連携し、地元電子書籍を充実したこと。昨年設立された北海道デジタル出版推進協会（代表理事・林下英二中西出版社長、19団体）が提供した308点が今回、貸し出しできるようになった。「北海道の樹木ベストセレクト100」（亜細亜社）「北海道の考古学」（北海道出版企画センター）「北海道と明治維新」（北大図書刊行会）のほか、道内の雑誌「財界さっぽろ」「ポロコ」も2012、13年発行のものが読める。

林下代表理事は「もっと多くの北海道の出版社に参加してもらい、毎年300点くらい電子書籍を提供していきたい」と話す。日本図書館協会では「地元出版社と協力し、地域の出版物を積極的に電子書籍化し、貸し出しできるようにしたのが札幌市の電子図書館の特色」と評価している。

札幌市中央図書館では「今後、電子書籍を充実させたい。障害者や病院に入院している人も利用しやすいし、学校教育にも役立てることも進めたい」（浅野隆夫情報化推進担当係長）としている。

札幌市電子図書館のトップページ

